

乳がん高度検診・治療センター NEW-す NO.89

2021.10



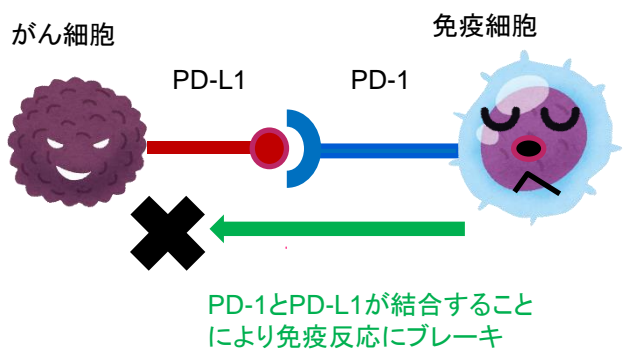
トリプルネガティブ乳がんに対する 新しい免疫チェックポイント阻害薬の登場！

手術の対象とならない、または再発したトリプルネガティブ乳がん*でPD-L1(ピーディエルワン)陽性の患者さんに対する治療法として、免疫チェックポイント阻害薬であるテセントリク(一般名:アテゾリズマブ)が注目されていることは乳がん高度検診・治療センターNEW-す No.68で紹介しました。このたび、同種の薬剤としてキイトルーダ(一般名:ペムブロリズマブ)が使用可能となりましたので今回の主題に取り上げます。

*トリプルネガティブ乳がん: ホルモン受容体(エストロゲン受容体、プロゲステロン受容体)とHER2がいずれも発現していない乳がん。

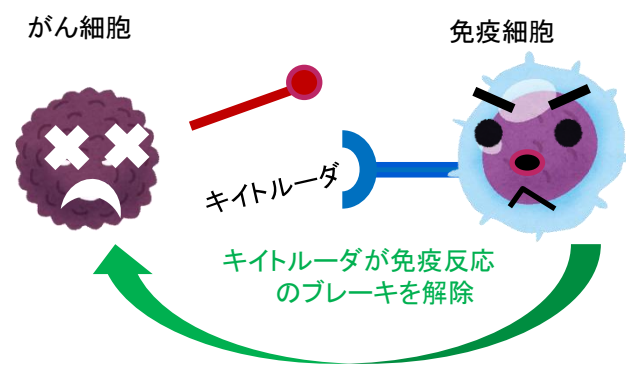
がんに対する免疫反応とキイトルーダの作用メカニズム

がん細胞は、免疫細胞の働きにブレーキをかけるしくみの1つとして、がん細胞の表面にPD-L1という物質を出します。このPD-L1が、がん細胞を攻撃する免疫細胞のもつPD-1(ピーディワン)という物質と結合すると、免疫細胞の働きにブレーキがかかり、がん細胞は免疫細胞の攻撃を免れます。免疫チェックポイント阻害薬はPD-1やPD-L1と結合して、このブレーキを解除し、免疫細胞が本来もつ機能を発揮しがんを攻撃する画期的な治療法で、一種の分子標的治療薬です。テセントリクがPD-L1に結合するのに対して、キイトルーダはPD-1に結合することで、効果を発揮します。



決め手となるのはPD-L1検査

トリプルネガティブ乳がんのうちでもキイトルーダの治療対象となるかどうかはがんとその周辺の免疫細胞(リンパ球、マクロファージ)の表面にPD-L1の発現する程度で評価します。検査は摘出したがん組織を用い特殊な染色により判定します。PD-L1の発現がある一定値以上(CPSという指標が10以上)の患者さんがキイトルーダ治療の対象となりますが、その率はトリプルネガティブ乳がんの38%くらいとされます。



副作用について

キイトルーダは抗がん剤であるジェムザール(一般名:ゲムシタビン)やカルボプラチン(一般名:同じ)などとの併用で投与されます。キイトルーダは免疫細胞の攻撃力を取り戻してがん細胞を攻撃する治療法ですので、免疫細胞の働きが時として過剰となり、正常な臓器にも炎症などの症状が現れる場合があります。注意すべき副作用は、呼吸器、消化器、内分泌、神経、循環器、血液、皮膚、眼など広範囲にわたります。当院では、こうした「免疫関連有害事象」が生じても適切に対応できるように関連施設をも含めたネットワークを構築して、万全の体制で取り組んでいます。

